

機関番号：22501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 20 年度 ～平成 22 年度

課題番号：20592615

研究課題名（和文） 妊娠期の夫婦の役割調整とその役割調整を促すための看護介入の明確化

研究課題名（英文） Married couples' role adjustment during pregnancy period and nursing intervention to promote the role adjustment

研究代表者 林ひろみ（HAYASHI HIROMI）

千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授

研究者番号：90282459

研究成果の概要（和文）：妊娠期の夫婦は、子育てに必要な育児・家事・生活習慣の修正・精神的支援における役割行動についてイメージし始めているが、まだ漠然とした状態であった。産後、夫婦が主体的に子育てに取り組むための予期的準備を促すためには、産後の生活の変化と必要な役割行動について情報提供を行うとともに、現在の役割調整に対する夫婦それぞれの評価を確認すること、さらには、互いに期待していることの出出を促し、夫婦間で確認することを支援する看護介入が有用である。

研究成果の概要（英文）：Pregnant couples had started to have a vague image of their adjusted roles concerning parenting, housework, lifestyle changes, and emotional support to each other, after the birth of the first child. It was suggested that the necessary information regarding the couples' actions and the roles of postnatal life should be provided to promote their proactive parenting. Moreover, the nursing intervention was effective to support the couples to confirm their assessment of each other's current adjusted roles, and to express and share their expectations with each other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
平成 21 年度	600,000	180,000	780,000
平成 22 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：看護学・役割調整・夫婦

1. 研究開始当初の背景

妊娠して子どもを産み育てるといふ親への移行は、親になる誰しもが経験する出来事であり、個人あるいは家族の成長・発達段階の時期である。しかし、それまでの夫婦の生活に親役割を加え役割の再編成を行うことは、夫婦にとって混乱する危機的段階でもあると言われている。研究代表者である林は、

先行研究において第1子誕生後の夫婦を対象とし、子どもの誕生にとりなう父親役割行動の調整過程における特徴を明らかにした。また、その結果を基に、第1子誕生後の夫婦が父親役割をより円滑に調整することを目指した看護介入を行い、夫婦なりに父親役割行動を調整するために有効な看護介入を同定した。また、林と大月は「乳幼児期の子をも

つ家族への育児支援プログラムの開発」におけるメンバーとして、育児期の夫婦を対象とした、夫婦の役割調整を促すためのプログラムの開発に取り組み、役割調整について夫婦で話し合うことを促したり、集団でのディスカッションを促す具体的な方法について開発し、実践した。

しかし、夫婦が主体的に子育てを行うためには、親となり子どもを育てるための準備期として位置づけられている妊娠期より、夫婦の役割調整を促す実践的な看護介入の確立が重要であると考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

妊娠期の夫婦は、育児期の生活や役割調整についてどのようにイメージしているか、そしてそれらに影響を与える要因をも明らかにすることにより、妊娠中に夫婦の役割調整を促すための看護介入のあり方を明確化することである。

3. 研究の方法

【研究 I】

(1) 研究目的

妊娠期の夫婦が、育児の夫婦の役割調整についてどのようにイメージし、それらに影響している要因を明らかにすることにより、育児期の役割調整における予期的準備を促すための看護介入指針を作成する。

(2) 研究方法

初めての児を妊娠中の夫婦 6 組を対象とし、子どもが誕生した後の生活や夫婦の役割調整に対するイメージについて半構成的インタビューにて収集した。インタビューデータの逐語録より、夫婦それぞれの役割調整に関して語られている文脈を抽出し、育児、家事、生活習慣野修正、精神的支援における役割毎に調整プロセスを整理し、役割調整に影響している要因を類別した。

(3) 倫理的配慮は、千葉県立衛生短期大学の倫理審査委員会の承認に基づき実施した。

【研究 II】

(1) 研究目的

初めての子どもを妊娠中の夫婦が、産後、主体的に子育てに取り組むために、子どもとの 3 人での生活をイメージすることができ、育児における役割調整について予期的準備を行うことを目的とした介入プログラムを実施、評価することにより、産後の役割調整に向けた予期的準備を始めるために効果的な妊娠期の看護介入を明らかにする。

(2) 研究方法

- ①対象者：初めての子どもを妊娠中であり、妊娠中期の夫婦である。
- ②介入プログラム：介入プログラムの目標を、夫婦が主体的に子育てに取り組むために、子

どもとの 3 人での生活についてイメージすることができ、育児における役割調整について予期的準備を行うことができると設定する。介入プログラム内容は、研究者のファシリテートのもと、産後の生活と必要な役割についてパンフレットを用いて情報提供を行い、夫婦それぞれが互いに期待する役割あるいは実施しようと思っている役割について媒体に書き出すことにより表出し、媒体への記述内容を互いに確認することを促すという構成からなる。

③介入における評価方法：評価のためのデータ収集内容と方法は、介入目標に対応させて作成した産後のイメージに関する思い(4 項目)、育児期の役割調整に関する思い(4 項目)、夫婦の関係性に対する思い(6 項目)の計 14 項目、「よくあてはまる」から「あまりあてはまらない」の 4 段階で自己評価する自記式質問紙を用いて、介入プログラム実施前と介入プログラム実施 1 か月後に夫婦それぞれの自己評価を収集した。また、役割調整の準備に対する思いや具体的な行動の準備状況については、介入プログラム実施直後と介入プログラム実施後 1 か月の時点で、自由記載により収集した。介入プログラム実施中の対象夫婦の言動については、許可を得て録音し、逐語録とした。

④分析方法：介入プログラム実施前と実施後 1 か月後の自記式質問紙より得られたデータの変化の様相を介入プログラムの目標に照らし合わせて評価した。また、介入プログラムで実際に実施された具体的内容と対象者の産後の生活に対するイメージと育児期の役割調整に対する思いを逐語録から抽出し、具体的な援助内容と対象夫婦の反応を対応させながら記述した。また、介入プログラム直後と実施後 1 か月時点で役割調整の準備に対する思いや具体的な行動の準備状況についての自由記載内容を質的に分析した。この具体的な援助内容と対象者の反応との関係性、介入プログラム後の育児期の役割調整の準備に対する思いや具体的な行動より、効果的であると評価された援助内容を同定した。

⑤倫理的配慮は、千葉県立保健医療大学の倫理審査委員会の承認に基づき、実施した。

4. 研究成果

【研究 I】

初めての子どもを妊娠中の妊娠 20 週～34 週の夫婦 6 組のインタビューデータを分析した。

(1) 育児における役割調整のイメージ

4 組の夫婦は産後夫婦で育児役割を調整しながら子育てを行っていくことをイメージしていた。夫は「妻が一人で育児をすることが大変である」「自分も育児を行いたい」「育児は自分の役割である」と育児役割を能動的

に自認しており、産後、育児役割全般を担うことをイメージしていた。妻は夫が子ども好きである様子、育児をしたいと思っている様子を捉え、夫と一緒に育児を行うことを期待していた。しかし、具体的な育児行動の調整は産後子育てを始めてから決まるだろうとイメージされていた。初めての育児に対する不安や育児行動に対する自信のなさなど否定的にとらえていた2組の夫は、一般的に父親の役割として捉えられているお風呂の世話行動に対して「父親の役割として必要とされていることには応じよう」と受動的に自認していた。妻も同様に初めての育児に対する不安を抱き育児に対するイメージはまだほとんどないと表出していた。また、夫が仕事で忙しいために平日育児を行うことは難しいだろうと建設的に捉えおり、一般的に父親の役割とされているお風呂の世話行動を夫に期待し、その他の育児役割のほとんどは実母の協力のもと妻が担うことをイメージしていた。

産後の育児についてのイメージとしては、「2、3時間おきに授乳をする」「子どもの夜泣きへの対処ができるか心配である」「子どもの泣きが近所の人に迷惑をかけるかもしれない」などが挙げられていた。

以上のことから夫が育児も自己の役割であると能動的に自認している場合は、妻の夫と一緒に育児を行うことをイメージしているが、夫婦ともに育児に対する不安や自信のなさなど否定的に捉え、夫の仕事の忙しさに対して建設的に捉えている場合は、一般的な父親の役割とされているお風呂の世話を期待し、その他の育児は妻が引き受けることになるだろうとイメージしていた。いずれの夫婦も具体的な役割調整についてはイメージされていなかった。

(2)家事における役割調整のイメージ

6組ともに結婚あるいは妊娠をきっかけに家事役割を調整していた。

現在の家事における役割行動に対して夫も「分担できている」「行えている」「苦ではない」と肯定的に評価しており、妻も「夫は良くやってくれている」「分担できている」と肯定的に評価をしている家事行動については、産後も役割行動として継続して行い、妻の家事負担が増すため、より積極的に調整することをイメージしていた。しかし、夫が「苦手である」と否定的に捉えている家事行動については、産後も実施できないだろうと否定的に捉えており、妻も夫が行えない家事行動は家族の協力を得ながら行うことをイメージしていた。また、仕事を有している妻2名は、産前休暇後あるいは仕事を辞めた後の家事がどうなるのかイメージが不十分であると述べていた。

以上のことから、現在の家事における役割

調整方法の中で、夫婦ともに肯定的に捉えている家事行動は産後も継続することをイメージしていたが、否定的に捉えていた家事行動については、妻が家族の協力を得ながら行うことをイメージしていた。

(3)生活習慣の修正における役割調整

妊娠をきっかけとして「早く帰る」「趣味のための外出を減少させるあるいはなくなる」という生活習慣を修正している4組の夫は、産後、「自分も育児を行うため」に、あるいは「妻ができない家事を行うため」に、そして「妻の育児負担が多くなる」ために、「休日は家族で過ごす」「子どもの生活に合わせて自己の就寝時間や休日の過ごし方を調整する」ことをイメージしていた。現在の夫の生活習慣に対して肯定的に評価していた妻は、現在の生活習慣を継続させることを期待していた。仕事が忙しく「帰宅時間はあまり変わらないだろう」と妊娠後も生活習慣の修正が行われていない2組の夫婦は、産後の生活習慣の修正における具体的な役割調整のイメージは語られなかった。

以上のことから生活習慣の修正における役割調整についても現在の役割調整に対する夫婦が肯定的に捉えている場合は、産後も継続することをイメージしており、夫は子育てのためにさらに生活習慣を調整する必要性をイメージしていた。

(4)精神的支援における役割調整

3組の夫婦は、産後の妻の精神的状態が不安になりやすいことを認識してことから、夫は、妻の精神的支援のために妻の話を聞かなければならない、してほしいことを我慢しないで依頼してもらうことをイメージし、妻もイライラしている状態を見守り、話を聞いてほしいと期待していた。この3組は夫婦でよく話をしていると述べていた。2組の夫婦は産後の話を夫婦であまりしていないとし、精神的支援における役割調整についてのイメージは語られなかった。

以上のことより、精神的支援における役割調整は産後の妻の精神的不安定さについての認識により、精神的支援における役割調整を行う必要性をイメージしていた。

以上の結果より、妊娠中の夫婦は、現在の役割調整方法を夫婦それぞれがどのように捉えているかにより、産後も現在の役割調整を継続する必要性についてイメージしていた。しかし、産後は現在の生活とは大きく変化することを見越した具体的なイメージには至っておらず、産後のそれぞれの役割調整を具体的にイメージすることを支援する必要性が示唆された。また、現在の役割調整に対する評価が産後の役割調整のイメージに影響していることより、夫婦それぞれの評価を確認するとともに、役割調整を行うことの

メリットや役割調整ができないことによるデメリットを伝え、夫の役割自認をより肯定的に促し、妻の期待をより具体的にする援助が必要である。そして、互いの期待や実施しようと思っている役割行動を互いに確認することが予期的準備を行うために重要であると考え。これらのことを踏まえ、産後の役割調整における予期的準備を促すための介入プログラムの内容を以下のように整理した。

①産後の生活とそれに必要な役割についてイメージすることができることを介入目標とし、育児・家事・生活習慣の修正・精神的支援における役割調整に対して、夫婦の現在の役割調整方法と産後の生活および役割調整に対するイメージを確認し、産後の役割調整に向けて必要な役割の内容について情報提供を行う。それぞれの役割を調整することのメリットについて情報提供する。

②夫婦が互いに期待していることや実施しようと思っていることを表明することにより、互いの思いを理解することができることを介入目標とし、夫婦それぞれが期待するあるいは行いたいと思っている役割行動に対して表出をすることを媒体を用いて記入すること促し、記入した内容を相互に確認することを促す。

③育児期における役割調整について夫婦で準備を始めることができることを介入目標とし、互いに確認できた期待や行いたいと思っていることについて妊娠期よりできる準備を行っていくことを促す

【研究Ⅱ】

初めての子どもを妊娠中であり、妊娠 32 週目の夫婦 1 組に対して、研究Ⅰをもとに考案した看護介入プログラムを実施した。

(1)介入プログラム実施前と介入プログラム実施 1 か月後の自己評価の結果

夫は、「子育てをするために修正した方がよい生活習慣について具体的にイメージしている」「子どもが生まれた後は、家事を行いたいと思う」「子どもが生まれた後は、子育てをするために自分の生活習慣を見直し、修正したいと思う」という項目において「だいたい当てはまる」から「よく当てはまる」へと変化していた。他の項目は介入前後で変化が認められず、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と自己評価した項目はなかった。

妻は、「子どもが生まれた後の子どもの世話について具体的にイメージしている」項目が「あまり当てはまらない」から「だいたい当てはまる」へと変化していた。「私は、現在の夫婦の役割分担について満足している」項目は「よく当てはまる」から「だいたい当てはまる」へと変化していた。他の項目につい

ては介入前後で変化は認められず、「当てはまらない」と自己評価した項目はなかったが、「あまり当てはまらない」と自己評価している項目は、「子どもが生まれた後に、夫に行ってほしい精神的サポートについて具体的にイメージしている」と「子どもが生まれた後の生活において夫が期待していることを理解している」の 2 項目であった。

(2)介入プログラム実施後の役割調整のための準備状況

介入プログラム実施 1 か月後、夫は、「育児書にて育児について情報を得る。赤ちゃんを連れての外出をイメージする」という準備を行っていた。妻は、「育児用品を準備したり、育児書で育児についての情報を得る」という準備を行っていた。

産後の生活や役割についての夫婦の話し合いについては、夫婦ともに、「家事の役割分担について話し合っている」ことをあげており、夫は「子どもの世話に積極的に参加し、具体的な育児方法については妻からフォローをしてもらう」ことをあげていた。

(3)介入プログラム実施時の具体的援助内容と対象夫婦の反応

介入プログラム実施時に行われた援助内容と対象夫婦の反応を質的に整理した。〔 〕は具体的な援助内容を示し、《 》は対象夫婦の反応を示す。

①育児における役割調整に対して

〔育児を行うために役割行動について情報提供を行う〕〔育児行動についてどのように計画しているかを確認する〕ことにより、対象夫婦は《育児行動について計画していることを表出する》とともに、《育児行動に対する不安を表出する》反応を示した。〔育児行動の実際について情報提供を行う〕ことにより、《育児役割に対する期待について表出する》反応が示された。〔表出された育児役割に対する期待を肯定的に支持する〕とともに、〔夫が育児役割を担うことのメリットについて提示する〕ことを行った。

②家事における役割調整に対して

〔子育てに伴う家事の変化について情報提供を行う〕〔産後の家事が変化する理由について情報提供する〕とともに、〔産後の家事に対するイメージを確認する〕ことにより、《産後の家事についてイメージしていることを表出する》反応が見られた。〔表出された家事行動の実際について情報を提供する〕ことにより《産後の家事行動のイメージが具体化する》反応が得られた一方で、《イメージが具体化されない産後の家事行動について表出する》反応については、〔現在の家事行動に対する負担感の程度を確認する〕とともに、〔産後の家事行動の実際について現在の違いについて情報提供を行う〕〔産後の家事行動の変化についてイメージすることを促

す]ことが行われた。《家事行動に対して夫婦で価値観の違いが表出される》反応が見られた際には、〔産後の家事行動の工夫について提案する〕とともに、〔産後の家事行動をどのように行うか夫婦で再調整することを促す〕ことが行われた。また、〔産後家事を調整する必要性について情報提供する〕ことも行われた。〔産後の家事役割について互いに期待しているあるいは実施しようと思っている役割について書き出してもらう〕ことにより表出された役割行動に対して、〔現在、家事役割を調整していることに対して肯定的評価を行う〕ことより《実施している家事行動に対する自己評価が表出される》反応がみられたため、〔表出した自己評価に共感を示す〕援助が行われた。

③生活習慣の修正における役割調整に対して

〔子育てを行うためには、これまでの生活を変える必要があることについて情報提供する〕ことより、《妊娠後の生活習慣の変化について表出する》《産後の生活習慣の修正に対するイメージと負担感の程度を表出する》反応が得られた。〔産後、子どもとの生活における生活習慣の修正が困難なケースについて紹介する〕とともに負担感が少ないと表出された内容に対して〔産後の生活習慣の負担感が少ないことに肯定的評価を示す〕ことと〔産後、子どもとの時間を作ることのメリットについて提示する〕ことを行った。

④精神的支援における役割調整に対して

〔産後、多くの夫婦が思っている夫婦のすれ違いについて情報提供する〕〔産後の女性の身体的・精神的変化について情報提供する〕

〔妻を精神的に支援するための具体的方法について提案する〕〔夫婦関係が子どもに与える影響について情報提供する〕〔夫婦関係を良好にするためのコミュニケーションについて情報提供する〕などが行われた。〔現在のコミュニケーション方法の捉え方について確認する〕〔現在、効果的であると思うコミュニケーション方法について確認する〕ことにより、《現在のコミュニケーション方法に対する思いを表出する》《現在、捉えている夫婦のコミュニケーションについて表出する》という反応が得られ、〔夫婦間の効果的なコミュニケーションについて提案する〕援助が行われ、同時に〔男性と女性が求めるコミュニケーションの違いについて情報提供する〕ことが行われた。対象夫婦は《現在の夫婦のコミュニケーションを振り返り、産後のコミュニケーションにおいてイメージしたことを表出する》を示した。

⑤育児・家事・生活習慣の修正・精神的支援における役割調整に対して〔夫婦それぞれが期待しているあるいは実施しようと思っていることを記述することを促す〕ことにより

〔互いが記述した役割行動を交換しながら、相手の思いを受け取ることを促す〕援助により、夫婦は一致している役割行動に対して《互いの思いを理解できていることを実感する》反応が得られた。〔夫婦なりに考えられている役割調整方法について肯定的に評価する〕〔産後の役割調整について妊娠期からできる取り組みについて考えることを促す〕援助を行った。

以上の結果より、具体的援助内容は、【産後の生活に必要な役割行動について情報提供を行う】【産後、役割調整を行う必要性について情報提供を行う】【産後の具体的な役割行動の実際について情報を提供する】【産後の役割行動の調整に対するイメージを確認する】【現在の役割行動の調整に対する評価を確認する】【現在行われている役割調整方法に対して肯定的に評価する】【産後に必要な役割行動に対して再調整することを促す】【産後、互いに期待していることの表出と共有を促す】という援助内容に類別された。

これらの援助を組み合わせることにより、介入プログラム実施1か月後の時点で、夫は産後の家事における役割調整と生活習慣の修正における役割調整において、妻は育児における役割調整において、よりイメージが具体化し、妊娠期から準備を始めようという取り組みへとつながっていた。しかし、現在までに介入プログラム実施1か月後の評価を得られた対象者夫婦が1組にとどまっているため、現時点では有効な看護介入を同定するにはいたっていない。現在もこの介入プログラムの実施を継続させており、対象者数を増やすことにより、妊娠期の予期的準備を促すために効果的な看護介入を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

第52回日本母性衛生学会に申請中

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 ひろみ (HAYASHI HIROMI) 千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授

研究者番号：90282459

(2)研究分担者

大月 恵理子 (OOTHUKI ERIKO) 埼玉県立
大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：90203843

坂上 明子 (SAKAJYO AKIKO) 千葉大
学大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：80266626

峯 馨 (MINE KAORU) 千葉県立保健
医療大学・健康科学部・講師
研究者番号：30299896

(3)連携研究者 なし